

『医療とホスピタリティと文化』

LIBRARY ICHIKO 150 SPRING 2021 4月30日 発売予定



A5変形 128頁 定価(本体1,500円+税)

【監修・アートディレクター】
河北秀也(かわきた ひでや)
1947年生まれ。日本ペリエールアートセンター主宰。著書に『デザイン原論』など。本誌プロデューサー、アート・ディレクター。

【編集・ディレクター】
山本哲士(やまもと てつじ)
1948年生まれ。
政治社会学、ホスピタリティ環境学。
主な著書に、『ミシェル・フーコーの思考体系』、『ホスピタリティ講義』、『国つ神論』、『くもの日本心性』、『高倉健・藤純子の任侠映画と日本情念』、『フーコー国家論』ほか多数。

真正の医療はほんとは少ない。産業社会は、ほとんど「医療化」されて、医療ではないことと関与し、経済や統治や道徳にまで「医療」に無関係な医療化が浸透してきたのが産業文明である。人々も医療がすべてを解決してくれると信じこんでしまっている。コロナ禍で、医療の重要さと転倒との双方が露出している。規則設定や政策は「社会医学」さえからも遠のいてしまう。病や痛みそして死は、「自分自身」のことでしかない。自分は自分の一つの病を、いろんな形でなしていきながら、生き、そして死んでいく。自分の心身の「痛み」は誰も理解不可能である。想像で理解し、身近な他者が心配し、それを気づかってくれる。でも、病気にいるのは自分である、痛いののは自分である、そこに、「自律性」の根源がある。Suffering＝苦悩は、自分の自分への関係である。それを、自分に沿って助けて、癒してくれるのが、真正の医療行為である。それは、1対1でしかない「限界」にあるゆえ、非常に貴重で大切なことである。

病気を除去しようとか、痛みを殺そうとか、死を無くそうとかはできないこと。そこへ、治療、鎮痛、延命として医療化は関与してきたが、それらに依存するほど、人々の自律性は麻痺していく結果を生み出してしまふ。医学的処置が、医療化においては、病気を生み出す「逆生産」が起きる。感染する人もいれば感染しない人もいる。人によって違う。病の一掃・撲滅はありえないゆえ、いかにそれと付き合うかが、大事な事になる。

産業社会的な仕方では機能しないことがあちこちで多発してきた。何が、「自分に」大切なことであるのか。「医療化された医療」のほとんどは素人でもできることであるが、素人に絶対的にできない関与で「わたし」を治療し、癒しへの自律性を開いてくれる真正の医療行為は「わたし」に「触れて」くれるもので、「触り」「いじくる」ことからはほど遠い「述語的なアクション」である。数字や統計やただの症例事項ではない。統計数字などは医学的医療から、最も遠いものである。「わたし」を数量化などできないし、測定可能なものをいじっているだけの数字など科学ではない。例えば25%の死亡率などと言ったときは、実際の「4人に1人」では全くない。これはきっぱりと言っておかねばならない。

感染が下火になってきたころ、医学的探究が幾分かはつきりし、ワクチンの効果が出てくるだろう。それは歴史が物語っている。感染者や彼らに対応する医療従事者たちを、社会の害とみなしてしまうような「医療化の道徳化」は大きな間違いである。命をかけた感染への闘いに、心から感謝することだ。医療は微妙なデリケートな問題であるが、「自分自身の自律性」から考えていくのが基本だ。

▼山本太郎「新型コロナウイルス感染症のパンデミックから一年余が過ぎた。選択可能な未来へ向けて、いま、私たちが考えるべきこと」▼赤星隆幸先生に聞く「白内障手術心とすしの意志とこところ」患者のための世界最高峰の医療技術とホスピタリティ」▼西野憲史「コロナ時代の認知症予防」▼坂井秀夫「毎日歯ブラシしても歯を失うのは何故か」▼山本哲士「医療と医療化との違い・真の医療行為と病」痛み/健康の自律性」▼笹島寿美インタビュー「日本の精神文化としての着物」衰退と未来」▼浅利誠「述語的言語の日本語とコブラ」【連載2】▼金谷武洋「話せる日本語」(3)▼カラー特集「着付けと帯結び」笹島寿美

【LIBRARY ICHIKO】は季刊誌です。次号は二〇二二年七月末発行予定

文化科学高等研究院出版局

Email: ehesc@gol.com

ehescbook.com

ご注文は「R」→「C」→「F」
Fax. 03-3294-2177

文化科学高等研究院出版局 tel.03-3580-7784 fax.03-5730-6084

医療とホスピタリティと文化

LIBRARY ICHIKO 150 SPRING 2021 1500円(税別)

ISBN 978-4-910131-10-8 C1010 ¥1500E

書店名

部数